

そほう  
組 報

# かながわ

No. 7 1994.3.15

身近なお寺の情報誌



しずかに思えば、阿弥陀如来のはかりしれない広大な本願は、乗り越えることが難しい迷いの海を渡してくださる大船であり、なにものにも妨げられないその光明は、私の煩惱の闇を破ってくださる智慧の太陽である。

親鸞聖人『教行信証』

浄土真宗本願寺派

そほう かながわ 第7号

## 四年後に五百回遠忌法要

# 蓮如上人のご生涯に学ぶ

本願寺の中興の祖、蓮如上人は一四九九年（明応八年）に数え年八十五歳で往生されました。本山本願寺では、来る一九九八年に、上人の五百回遠忌をお勤めいたします。いよいよ法要にあたっての募財が始まり、法要への態勢が着々と整えられていきます。私たちが、「御文章」などでいつも親しんでいます蓮如上人の生涯を振り返ってみましょう。

### 一、誕生

蓮如上人は、一四一五年（応永二十二年）に京都東山にあった本願寺に生まれました。当時の本願寺は、阿弥陀堂が三間四面の建物であったとの記録があるようにこじんまりとしたものであった。そのころ親鸞聖人の流れを汲む真宗は、仏光寺派・三門徒派・高田派など大変栄えていた。しかし、親鸞聖人の墓所である本願寺は「人跡たえて、参詣の人ひとりもなく、さびさびとしておわします」（本福寺跡書）という状態であった。

### 二、門主就任

蓮如上人は正室の子でなかったため、部屋住まいの生活をおくるが、その間勉強に励み、親鸞聖人の著書やその解説書のごとく書写している。四十三歳の父存如が亡くなり叔父如乗の強い推挙により、思いがけなく八代目の門主となる。

### 三、精力的な教化

四十五歳の時、「御文章」の第一号が発せられ、これより書簡による教化活動を展開する。その内容は、親鸞聖人の教えが平

易にそして簡潔に示されており、その影響力はまたたくまに拡大していった。各地にあった念仏集団にとって、待ち望んでいた念仏の指導者が現れたのである。また教化にあたっては、寄り合い談合という話し合いを中心とする法座活動を押し進め、各地に講を形成していった。また、上人自身も門徒と平座で接している。寒いときは燗をした酒で迎え、暑いときは酒を冷やして迎えるよう指示するなど、その人柄も多くの人々を引きつけるものであった。

### 四、吉崎進出

そして、六年後には比叡山の僧侶によって本願寺が焼き討ちされるほどに成長する。蓮如上人は近江一帯を転々とするが、その間にも門徒の数は増えつづけ再度弾圧を受ける。その後も比叡山との軋轢は続き、つ

いに一四七一年（文明三年）五十七歳のときに越前吉崎の地に坊舎を建て移転する。教化の拠点を吉崎に移した蓮如上人は前にもまして「御文章」を精力的に書き、布教活動を展開する。半年もたたないうちに、吉崎へ多くの人々が群参するようになり、吉崎は大きな門前町を形成していく。

### 五、正信偈和讃の開版

五十九歳のとき、親鸞聖人の著作の中から、「正信偈和讃」を日常の勤行と定めて、版を起こす。そして、その印影本は、たちまち門徒の間に流布する。この事業は、真宗の独自性だけでなく、教化の上でも大きな力を発揮することとなる。現在私たちが日頃親しんでいる正信偈のおつとめは、この時から始まったのである。

### 六、一向一揆

吉崎の発展の中で弾圧を予期した蓮如上人は、守護や他の寺院勢力に刺激を与えないよう門徒に自重を促す「御文章」を次々と書かなければならなくなる。真実の教えに目覚めた門信徒は、莊園と守護の二重支配などの戦国の世の矛盾に目を向けるようになるが、在地権力者の力関係にも左右され、蓮如上人の抑制の及ばない動きを示す

ようになる。一向一揆の動きである。そのため、蓮如上人は、吉崎に拠点を移してわずか四年で河内（大阪）へ赴くこととなる。

### 七、山科本願寺

一四七八年（文明十年）、ついに蓮如上人は京都山科に本願寺を再興する。上人六十四歳のときである。その後、山科は一大仏国をなした。また、七十五歳で隠居した後も撰津に石山本願寺の基礎を造るなど精力的な活動を続けた。



戦国の世に生きられた蓮如上人は、さびさびとした本願寺を一代にして、日本最大の教団に育て上げられました。それは、あくまでも親鸞聖人のみ教えを正しく人々に伝えていきたいとの願いの中で形成されていったのです。また、上人は、生涯で五人の妻を持ち、二十七人の子に恵まれました。蓮如上人については、念仏者として、また教団経営者の立場からなど、多くの方々がいろいろな評価をされています。中には、晩年、本願寺の権力体勢を固めたことなどに否定的な評価を下している方もあります。五百回遠忌を迎えるにあたり本願寺中興の祖・蓮如上人に注目しましょう。



### テレホン法話

ちょっと一息。電話で仏さまのみ教えを！

- 築地本願寺こころの電話  
TEL.03(3541)0282  
TEL.045(662)5629
- 長念寺テレホン法話  
TEL.044(911)8282
- 横浜布教所テレホン法話  
TEL.045(341)5700

### ビハーク電話相談

一老いの悩み、病の苦しみに一

相談日

毎週月・金曜日／午後2時～5時

浄土真宗東京ビハーク（築地本願寺内）

TEL.03(5565)3418

# 組の動きを ふりかえる

1993(平成5)年度 神奈川組活動報告

'93年4月~'94年3月

## ■第三期神奈川組連続研修会が発会

神奈川組の連続研修会は第二期が、六十七名の参加者によって始まりました。第一回目の研修会は四月十七日に宝光寺で、「宗教とは何か」をテーマとして開催され、以降二カ月に一度行われています。全十二回にわたって行われるこの研修会で、ご門徒さんたちは浄土真宗のみ教えを熱心に勉強されています。

## ■神奈川組仏教壮年会

平成四年五月に結成された神奈川組仏教壮年会も二年目に入り、会員も約百五十名になってますます盛んに活動を行っています。五月二十九日、七月三十一日、十月三十日には、東大名誉教授・早島鏡正師(宣正寺前住職)による「ゴータマ・ブッダ／その生涯と思想」をテーマとした研修会が開催されました。



一月二十九日には「正信偈に聞く」をテーマにした研修会、二月十五日・十六日には「念仏に生きた人々」をテーマに一泊研修会が箱根で、同じく早島鏡正師を講師にお迎えして開

催されました。

## ■神奈川組仏教婦人会連盟「めぐみ会」

六月四日、長延寺において総会。池田行信師(東京教区相談員・栃木北組慈願寺副住職)による「女性と仏教」をテーマとした記念講演が行われました。九月三日には、最乗寺にて武蔵野女子大助教授・山崎龍明師(西組法善寺住職)による研修会を開催。テーマは「聞法実践／いのちを育てるいとなみ」。

## ■第二十二回南ブロックお寺の学校

毎年、神奈川・静岡・山梨の三県から子供達が集まって開催される、「お寺の学校」が、七月二十七日、二十九日静岡県三島市の「箱根の里」でひらかれました。子供達は、箱根の原生林ハイクをしたり、木を削ってスプーンやお箸を作ったりして、楽しい三日間を過ごしました。

今年度は、私たち神奈川組が担当にあたり、横浜市旭区の清来寺にて、七月二十六日、二十八日に開催予定。参加資格は小学校三年生から中学校三年生まで。参加をご希望の方は、

所属寺院までお問い合わせください。



## ■門徒幹部研修会

門徒総代研修会から門徒幹部研修会に名称を変更。門徒総代、世話人等が集まり、十一月九日に善然寺で、池田行信師による「浄土真宗寺院と門徒幹部のあり方」についての研修会を開催しました。

## ■坊守会

五月二十五日、十月三十一日、二月八日(総会)に坊守(お寺の奥さん)会が開催されました。

## ■僧侶研修会

十二月二十一日、熱海において組内の僧侶が集まり、一泊研修会が開かれました。「宗門の動向について／当面する問題点と今後の展望を踏まえて」と題されたこの研修会は、宗会議員・石上智康師を講師にお迎えして、平成十年に行なわれる「蓮如上人五百回遠忌法要」を中心に、積極的な話し合いがもたれました。

## ■往生

二月、光輪寺前住職・村石恵宗師往生。八十九歳。  
九月、善教寺住職・平等通昭師往生。九十歳。

## ■普請

十月、善龍寺前坊守・斉藤栄子さん往生。八十一歳。  
三ツ境布教所本堂・落慶  
常念寺庫裡・竣工  
最乗寺会館・竣工



# ぶつ えん を ぎょう 行 ず る

村石 恵照



鎌倉時代、知恵の法然坊と呼ばれた当代隋一の学僧にして天性の大徳であった法然上人は、自らを「愚痴の法然坊」と称した。実際は愚痴を言っていたわけではなかったが、深い自省から自らのありのままをいったのである。

愚痴を含めた人間の様々の迷いを煩惱と言う。胸が痛い、癌ではないか、死ぬのではないか、残された家族はどうなるのか、と妄想、妄念が起こってくる。これも煩惱のなせるところである。私の悩みは、他人や社会にも責任があるのではないか、と言うかもしれない。悪徳業者にだまされ、債鬼に脅かされている人もいるだろう。なにも自分だけの責任で自分は苦しんでいるのではない、と言うかもしれない。もちろん、世の中に起こること、一切は連動しているのである。つまり縁起の世界に我々は生きているのであるから、私の苦しみはすべて私だけの責任ではない、と考えるのももつともなことである。

しかし、私が悩むこと自体は、社会が悪い、あいつに騙されたと思うことで解決できるわけではない。この迷いの世界における「わたくし」という事実は、「独生、独死、独去、独来（ひとり生まれ、ひとり死し、ひとり去り、ひとり来る）」（大無量寿経）である。このような「わたくし」の問題に思いを寄せることができている人

は、すでに大いなる仏縁に恵まれているのである、と気が付くことが肝心である。

この煩惱だらけの「わたくし」に仏縁を恵み、やがて仏としてのほんとうの安らかなるいのちと生まれかわらせる働きが念仏である。念仏は仏縁を体験するはたらきである。

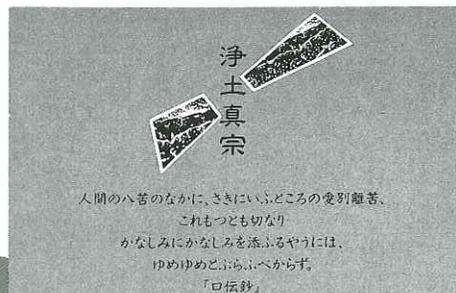
人生は悩むように出来ているのである。命あるものは死ぬるよう出来ているのである。死ぬだけでは私の悩みの解決は出来ないようになっていのである。「独生独死」の「わたくし」が念仏を行じてゆくところに、私の業（ごう）が納得される世界がひらけてくるのである。

仏教は常に、「今、ここ」の「わたくし」の立場で仏縁を行じてゆくのである。癌にかかった人が、「南無阿弥陀仏」と称えて治るのか、と考えるのは、既に仏縁を他人事として「今、ここ」の「わたくし」から離れているのである。

「今、ここ、わたくし」の南無阿弥陀仏である。見かけの生きざま、死にざまは、問題ではない。ご利益は念仏する「わたくし」におのずからあらわれてくる。

南無阿弥陀仏

## 仏事のころえ



会葬者向けのしおり  
—神奈川組青年僧侶会刊—

## このましくない葬儀の習俗

葬儀にまつわる習俗や迷信は数多くあります。たとえば、根強い習慣として「清め塩」があります。この習慣は、死をケガレとして忌み嫌う俗信から出てきました。

しかし、仏教では、そのように死をケガレと見なすことはいたしません。そもそも親しかった故人を、けがれたものと見なすこと自体、故人にたいして大変失礼なことでもあります。

その他にも、火葬場の行き帰りの道を変える、まもりかたな守刀を置く、出棺のとき棺を回す、友引の日に葬儀はしないなど、あげればきりがありません。これらはみな、死者をケガレとみなすところから出てきた迷信であり、仏教本来の教えからすれば、誤った習慣といわねばなりません。

よく浄土真宗に生きる人々は「門徒もの知らず」と評されることがあります。しかしそれは、念仏の教えを逸脱するような習俗を、受容することなく仏事を営んできたからです。つまり「門徒もの知らず」は、正しくは「門徒もの忌まず」であって、ケガレやタタリにとらわれ死を忌み嫌う俗信に、迷ったり惑わされることなく、真実の教えに生きる姿をいうのであります。

なお、神奈川組青年僧侶会では、会葬者向けのしおりを作成いたしました。会葬礼状には「清め塩」を添えるのではなく、このしおりを添えて、配付して頂ければ会葬者にもご理解いただけるものと思えます。所属のお寺でお分けてしています。



静かなたずまいの最乗寺

## 自然を残し続けるお寺

### 最乗寺

横浜市港北区勝田町一二七七

お寺を訪ねて (6)

は、数え切れないほどの沢山の木々がある。

かつてこの地域は、丘陵の連なる田園地帯で、植物も豊富だった。しかし、二十年ほど前から、港北ニュータウンの開発事業が始まり、その開発が進むにつれ、山々は崩され、自然が破壊されていった。そこで、坊守の知恵子さんは、シダの絶滅の危機を感じ、この地域にどの位の種類のシダが生息しているのかを調査し始めた。そして、次第にその魅力に取りつかれ、一株ずつ境内に移植し、保存に取り組んでいる。その数は四十種以上にもおよび、古い木の幹や石に這って伸び、足元に気をつけながら歩かないと、つい踏んでしまうほど生い茂っている。

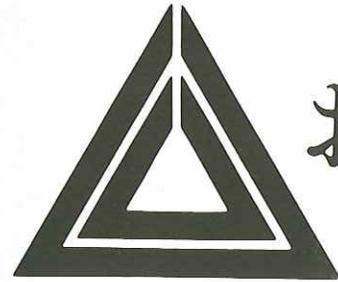
「シダの見ごろは四月から十一月、特に春の芽出しや、梅雨の雨に洗われた新緑の美しさは格別。また、寒さに弱いものは特別にハウスを作り大切に冬を越させます」と、坊守さんは目を輝かせにこやかに語られる。

新しく変わりゆく町並にあつて、自然を残し続け、沢山の草木に囲まれている最乗寺。ここは一年を通じて緑豊かな環境にある。

港北区勝田町の中原街道沿いにある最乗寺は、蓮如上人のお弟子であった教龍法師が京都山科よりこの地におもむき、文明十八年（一四八六年）に建立された。

山門をくぐると左手には、まず、空までとどきそうな巨大なイチヨウ（樹齢約五百年）が、また、これと向かいあつて右手にはハクモクレン（樹齢約三百年）が目に入る。この二本の木は、いずれも横浜市名木古木の指定を受けている。その他にも境内に

手のしわとしわを合わせて…しあわせ



お仏壇の

はせがわ



お仏壇の  
はせがわ



テレビでおなじみの  
……ゆうこちゃん

お仏壇のある豊かな暮らしをお届けします。

お仏壇のはせがわ

会社概要

資本金：26億3,675万円  
株式総数：1,136万株  
社員数：850名  
製造部：株式会社はせがわ美術工芸(国宝美術品、寺院神社)  
株式会社長谷川仏壇製作所(純金箔仏壇)  
長谷川江川木工(唐木仏壇)  
南長谷川唐木仏壇製作所(唐木仏壇)

業界初の  
上場企業

ホームセンター事業部：代0489-83-1511  
昭和59年 京都西本願寺阿弥陀堂  
昭和大修復事業  
昭和62年 京都清水寺開山堂御厨子・三重塔  
堂内修復事業  
昭和63年 福岡証券取引所業界初の株式上場

横浜・川崎地区の店舗ご案内

- 上大岡店 横浜市港南区日野5-1-25 ☎045-844-5740
- 戸塚店 横浜市戸塚区柏尾町440-1 ☎045-824-1166
- 今宿店 横浜市旭区今宿東町1621 ☎045-951-5311
- 新杉田店 横浜市磯子区杉田1-2-3 ☎045-774-6011
- 金沢文庫店 横浜市金沢区谷津町352-7 ☎045-701-4594
- 大船店 神奈川県鎌倉市岩瀬1-15-18 ☎0467-46-4235
- 川崎店 川崎市川崎区東田町2-1 ☎044-222-7577
- 鷺沼店 川崎市宮前区東有馬1-1-19 ☎044-852-1268
- 鶴見店 横浜市鶴見区駒岡町1488-1 ☎045-583-2271
- 町田店 東京都町田市町田1-21-14 ☎0427-29-6711

営業時間 午前10時～午後7時 日曜・祝日も営業いたしております。



浄土真宗本願寺派

わたしたちのお寺です

神奈川組

- 円光寺 〒210 川崎市川崎区台町4-21  
石川 康承 ☎044-266-2677
- 宝円寺 〒210 川崎市川崎区境町5-10  
飯田 琢亮 ☎044-222-3941
- 光徳寺 〒210 川崎市川崎区京町1-14-3  
林 信順 ☎044-333-3997
- 正楽寺 〒210 川崎市幸区南幸町2-49  
佐々木泰博 ☎044-522-1961
- 高元寺 〒211 川崎市中原区宮内4-3-12  
宮本 義孝 ☎044-777-6544
- 長念寺 〒214 川崎市多摩区登戸1416  
小林 泰善 ☎044-911-2549
- 常念寺 〒215 川崎市麻生区栗木203  
古市 溪峰 ☎044-988-0205
- 善龍寺 〒221 横浜市神奈川区斎藤分町33  
斎藤 幸紹 ☎045-491-9431
- 東善寺 〒223 横浜市港北区中川7-18-29  
長谷尾芳雄 ☎045-911-3509
- 寿福寺 〒223 横浜市港北区茅ヶ崎町1026  
多田 晨向 ☎045-942-3765
- 善教寺 〒223 横浜市港北区新羽町2396  
平等 勝尊 ☎045-541-7684
- 教覚寺 〒223 横浜市港北区新羽町2395  
平等 真証 ☎045-531-5050
- 光輪寺 〒223 横浜市港北区下田町3-2-9  
村石 恵照 ☎045-561-8671
- 最乗寺 〒223 横浜市港北区勝田町1277  
日野 教昭 ☎045-941-3541

- 長徳寺 〒223 横浜市港北区牛久保西3-9-1  
平塚 大乘 ☎045-911-7351
- 長延寺 〒226 横浜市緑区三保町2440  
雲居 隆栄 ☎045-932-3348
- 西勝寺 〒225 横浜市緑区新石川1-10-8  
藤下フサ子 ☎045-911-0156
- 最願寺 〒230 横浜市鶴見区矢向4-19-18  
藤江 昭道 ☎045-571-4694
- 宝光寺 〒231 横浜市中区桜木町3-5  
藤田 恭順 ☎045-201-3509
- 宣正寺 〒232 横浜市南区中里3-20-18  
早島 大英 ☎045-731-2679
- 善然寺 〒232 横浜市南区大岡2-26-17  
永野 弥然 ☎045-741-2351
- 清来寺 〒241 横浜市旭区今宿南町1895  
曾我 求真 ☎045-951-0012

本願寺築地別院都市開教布教所

- 横浜布教所 〒240 横浜市保土ヶ谷区和田2-12-19  
開田 蓮成 ☎045-341-7455
- 三ツ境布教所 〒241 横浜市旭区笹野台3-9-9  
原田 晃英 ☎045-364-2266
- 横浜緑布教所 〒226 横浜市緑区加賀原2-18-1  
小泉 敬信 ☎045-934-8648
- 磯子布教所 〒235 横浜市磯子区磯子3-7-12  
中戸 達雄 ☎045-752-2506
- 川崎布教所 〒213 川崎市高津区下作延845-16  
加藤 孝充 ☎044-855-2780

かながわそ  
「神奈川組」とは…

私たちの教団(浄土真宗本願寺派)は、全国に一万余りの寺院を擁し教団独自の地区割をしています。その一番小さな単位を「組」といいます。神奈川組は、川崎市と横浜市中部と北部の寺院によって構成されています。

浄土真宗本願寺派東京教区神奈川組

組長/永野 弥然  
副組長/林 信順  
副組長/斎藤 幸紹  
教区会議員/藤江 昭道  
相談員/小林 泰善

# あ/り/が/と/う

私たちは感謝の表現として「ありがとう」という語を用います。文字通り「有ることが難しい」という語なのですが、実はこの表現こそ、お釈迦さまの教えに由来しています。

『法句経』に「人間として命を受けることは有ること難く、やがて死すべきもの（人間）が生きていることも有ること難し。正しい教え（仏法）を聞くことは有ること難く、その教えに目覚めた人たちが出現することも有ること難し」とあります。

さまざまな縁のなかで、得難くして恵まれた命の尊さが示されています。しかもそれは、仏法を聞く人生が開かれているからこそ、尊い命なのだ、お釈迦さまはお説きになるのです。

仏法にあうと、今まで見えなかったものが見えてきます。人それぞれが、それぞれの条件の中で生きている現実が見えてきます。不利な境遇にありながらも、その条件を活かして精一杯生きる尊い人の姿も見えてきます。恩恵に預かりながら、不平不満を言う浅ましい自分の姿も見えてきます。

仏法にあう人生だから「有り難う」の言葉になるのです。

## 編集後記

◆冬期オリンピックを見てみると、

世界記録更新とかで、賑わいを見せている。私は、選手を自分に置き換えて見ているのだが、他の人はどのように見ているのだろうか。（M・F）

◆五十回忌は敗戦の年。過去帳には戦死、戦災死、幼子の死。何故早く止められなかったのか涙が出る。英霊という美名はその悲惨さを覆い隠す。戦いの犠牲者は敵味方を問わず数知れず。いまサラエボでも。（T・K）

◆世界が、そして、日本が、日まぐるしく揺れ動く変動の時代。その中で右往左往している私たち、自分の現在地をしっかりと確認していかなければ……（Y・F）

◆「悪魔」という名を子どもにつけたことが騒動になりました。生まれたばかりの子どもでは自分の意思を表明できず、自分の名前が騒動になっていることすらわからない。子どもは親の所有物なのではないでしょうか。（Y・M）

◆「組報かながわ」は、浄土真宗本願寺派のご門徒のための広報誌です。皆様からのご意見やご質問などを、お待ちしております。（D・H）



浄土真宗本願寺派（西本願寺）

組報かながわ No.7

■発行日 1994年3月15日  
(毎年1回3月発行)

■編集発行 浄土真宗本願寺派  
東京教区神奈川組  
基幹運動推進委員会

〒232 横浜市南区大岡2-26-17 善然寺内